



# なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.22 Jul.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

## 「なぎさシリーズ」

今回の旅は、高知県須崎市。太平洋に面した小さな山あいにある人口 80 人あまりの漁村「久通（くつう）」。海とともに世代を継いできたこの地の沿岸で、さまざまな人たちと一緒に藻場の再生に取り組む村のおじいちゃん漁師を鹿児島大学の鳥居さんが訪ねました。

なぎさシリーズ No.18

## 手をたずさえながら守る

### 久通の藻場

鳥居 享司

## 須崎市久通地区へ向かう

県道 23 号線、鳥坂トンネル付近から脇道に入る。細く曲がりくねった道を約 30 分行った先に「久通地区」はある。背後の山林から集落を一望してみる。眼下の集落からは威勢のいい話し声が聞こえてくる。井戸端会議でも開催されているのだろうか。さて、久通地区に到着すると、かつて久通小学校だった場所に建つ「ふるさと久通コミュニティセンター 凧の里」へ案内された。木の香りと温もりを感じる素敵な建物に 10 名を超える「なぎさの守り人」が集結



していた。当初、活動の様子をみながらお話しをうかがう予定だったのだが、前日まで降り注いだ大雨による想定外の濁りによってウニ駆除作業は中止。コミュニティセンターで活動の様子を教えてもらうことになった。

## 藻場が消えた

久通地区では、イセエビ、アワビ、サザエ、テングサなど豊富な磯根資源を対象にした漁業が盛んに行われてきた。しかしながら、1996 年ごろから「磯焼け現象」

	都道府県:	高知県
	地域協議会:	高知県環境生態系保全対策地域協議会
	活動組織名:	池ノ浦・久通磯焼け対策部会
	協定先:	須崎市
	構成員数:	136名(うち久通地区51名)
	対象資源:	藻場
活動内容:	計画づくり、モニタリング、食害生物の除去(ウニ類)、母藻の設置	



魚類などの食害によって磯焼けした藻場

がみられるようになり、藻場は次第に姿を消していった。それとともに、アワビやサザエ、イセエビも数を減らしていった。藻場に生息していた多種多様な魚も激減していった。

こうした事態を憂慮した高知県漁協久通支所では 2008 年より、国の緊急磯焼け対策モデル事業のサポート制度を利用し、漁師が中心となってウニ駆除を本格的に開始。2009 年からは「池ノ浦・久通磯焼け対策部会」を組織し、環境・生態系保全活動支援推進事業の認定を受けて活動を展開することとなった。

### 池ノ浦・久通磯焼け対策部会の結成

ここで問題になったのが、ウニ駆除や海藻の移植（種が実ったホンダワラ類やカジメ類を海底に設置し、藻場の再生をうながす方法）の実施体制である。久通地区の人口は約 80 名、正組合員は 21 名、准組合員は約 40 名いるものの平均年齢は 70 歳を超える。ウニ駆除の人手が足りない・困った。

そこで考えられたのが、地区外で働く久通出身者の参加である。漁業だけでは生計を立てられないことを理由に、地区外に居住する久通出身者は数多い。彼らは漁協の准組合員であり、週末に帰省して釣りを楽しむ人も多い。海に対する知識も豊富だ。彼ら呼び戻す方法は簡単・・・「我が息子よ、今週末は久通へ戻ってこい！」。

しかし、それでも人手が足りない。そこで本事業を支援している県職員を通じて、ボランティアダイバーを集うことになった。当初、ボランティアダイバーの参加に対して、久通地区の人々は戸惑いを隠せなかったようだ。沿岸ではイセエビやアワビなど



大量のウニの生息によって磯焼けが継続している



を狙った潜水器密漁が多発している。大切な磯根資源を狙われるのではないか・・・。

ただ、普段から交流のある県職員の紹介であること、ボランティアダイバーなしにはウニ駆除できないことなどを理由に、ボランティアダイバーと連携することとなった。幸いなことに、こうした活動に参加するボランティアダイバーは、普段から潜る



県内外から参加するボランティアダイバーの皆さん

海の環境悪化を食い止めるために何かしたいと思っていた人々であり、それ以降、久通地区の人々と協力しながら藻場再生に向けて大きな役割を果たすことになる。

こうして、久通地区の正組合員 21 名、准組合員 40 名、そしてボランティアダイバー、高知海洋高校や高知大学の参加のもと活動が実施されることとなった。

## 活動内容

池ノ浦久通磯焼け対策部会の主な活動内容は、ウニの駆除、海藻の移植である。

ウニ駆除については、ボランティアダイバーの参加が不可欠であるため、活動日は大潮に近い日曜日に設定し、年間 4 回から 5 回ほど実施する。久通地区の漁師は船上から箱眼鏡で覗きながらウニを駆除する。地区外に住む久通出身者は、素潜りで浅海



のウニを駆除する。ボランティアダイバーはボンベを背負って深い海域で活動する。女性陣は磯周りで活動したり、食事の用意をしたりする。それぞれの体力と得意分野を活かした活動を展開している。

なお、ボンベや昼食については部会負担、久通地区までの交通費は各自の負担である。2010 年度は、参加者はのべ 193 名、駆除数は約 42、000 個であった。参加者のうち 26%が地区外者（ボランティア、大学、高校）、さらに駆除したウニの 52%が地区外者によるものであり、ボランティアダイバーなどの果たした役割が大きいことが分かる。







海藻の移植については、ホンダワラとカジメについて行っている。ホンダワラは漁師が母藻を周辺海域で採取し、紙製のオープンスポアバッグを作成して投入している。カジメは高知大学が運んでくれた母藻をネットに入れて設置している。ただし、カジメはアイゴやブダイなどによる食害が発生し、消滅した。高知大学のモニタリングではカジメを網で覆うことによって食害から守ることができた。このことから、2011年よりカジメやアワビを移植・放流した海域

を中心に魚の侵入を防ぐネットを設置することとなった。

こうした活動の様子は「磯焼け対策部会だより」で紹介される。漁師の意識の持続とボランティアや学生のリピーター確保を目的に「たより」を定期的に発行・送付している。その発行回数は17を数える。

### 藻場が復活した！

コミュニティセンターでひと通りのお話しを伺った後、実際に海に出て活動の成果を紹介して頂くことになった。活動の成果はいかに！？

活動を行った海域に案内され、海を覗き込むと・・・びっくり仰天！2009年と2010年に磯焼け対策を行った海域ではホンダワラ、カジメ、テングサなどが生き茂っていたのだ。藻場が回復した海域ではたくさんの小魚が群れをなして泳いでいるし、



保全活動によってホンダワラ類が繁茂（はんも）するようになった

周辺海域へホンダワラが広がりを見せていた。「このあたりは、かつて、磯焼けをしていて、藻はほとんど生えていなかった。海底の禿げ石も今ではこの通り、藻場が生い茂っている」。活動の手応えをかみしめながら、漁師は教えてくれた。

活動が行われていない海域へも行ってみた。そこには藻場はみられなかった。白い



カジメ類も活動区域で認められるようになった

石が広がり、大量のウニが生息していた。さきほどの海と 100m も離れていないにもかかわらず、雲泥の違いがみられることにただただ驚くばかりであった。漁師によると今年はこの海域を対象にウニ駆除を行うのだそう。その成果は来年のお楽しみ！

## 藻場の恵み

海から帰った我々を待っていたのは、おばちゃん特製の「トコロテン」。よく冷えたトコロテンをさっそく頂く。うっ、うまい！そこらで市販されているトコロテンとはひと味もふた味も違う。汁もいい出汁が出ている！おばちゃんはニコニコ顔で「ウニ駆除したらテングサも生えてきたんだよ。汁の出汁はネンブツダイからとったものなんだよ。これも藻場が生えてきたから数が増えてきた。」と教えてくれた。



そうか・・・今、食べているトコロテンは「再生した藻場からの恵み」というわけか。ひとくちひとくち大切に食べたかったが、あまりの美味さにズルッと一気完食してしまった。ちょっともったいないことをした気がした。美味しいトコロテンをありがとう、ごちそうさまでした。



～ 著者プロフィール ～

鳥居享司（とりいたかし）氏  
鹿児島大学水産学部准教授・  
博士（学術）

1973年、愛知県生まれ。広島大学大学院卒。06年より現職。漁業・漁協経営分析、離島漁業の活性化問題に関心を抱く。

【メッセージ】日本の可能性は広大な領海に眠る。領海を保全し、水産食料資源を含めた多様な資源と環境を適切に管理・利用することが日本の未来につながると確信している。





## 技術をみがき・学ぶ「技術講習会」の開催

環境・生態系保全対策に参加する・検討されている方々を対象に、環境・生態系保全活動の技術をみがく・学ぶための「技術講習会」を開催します。

現在、各地域で取り組まれている具体的な保全活動の内容を見て・体験して・学ぶ研修を行います。ご応募お待ちしております。

技術講習会の会場及び開催日程の予定

干潟	山口会場	7月14～15日
藻場	大分会場	7月26～27日
干潟 浅場	三重会場	8月3～4日
藻場	北海道会場(予定・調整中)	10月頃
サンゴ	会場調整中	10月頃
藻場	三重会場(予定・調整中)	11月頃
ヨシ帯	茨城あるいは滋賀会場(予定・調整中)	11月頃

●詳細情報は！

ひとうみ.jp ( <http://hitoumi.jp> )

トップページ「イベント情報」に掲載

●お問い合わせ

JF全漁連漁政部 環境生態系チーム

Tel: 03(3294)9616 Fax: 03(3294)3347 e-mail: k-support@zengyoren.jf-net.ne.jp

●干潟・浅場・ヨシ帯・サンゴ礁講習会申込窓口：株式会社 水土舎 吉永、野口、かしい

Tel: 044(922)3265 Fax: 044(922)9369 e-mail:yoshinaga@suidosha.co.jp

●藻場講習会申込窓口：社団法人 水産土木建設技術センター 安藤、石岡

Tel: 03(3546)6858 Fax: 03(3546)6826 e-mail: w-ando@fidec.or.jp

～ 編集後記 ～

今回取材した須崎市の地元ならではの美味しい魚について話を聞くと、『メジカの刺身』と答えが返ってきた。メジカとは？『ソウダガツオ』のことである。一般に、ソウダガツオは血合いが多く、鮮度もすぐに落ちるので、ゆで節や塩焼き、煮付けなど火を通して食される。しかし、ここ須崎では刺身で食べるとのこと。特に、生後1年未満の稚魚『新子(しんこ)』が美味いそうで、高知産の『仏手柑(ぶしゅかん)』を絞り、醤油をつけて食べると、もちもちとした食感ですごく美味しいのだそうだ。新子は夏しか獲れないので、今回の取材では食べられなかったが、9月上旬ぐらいに開催される『めじか祭り』で新子が味わえるとのことなので、今度おじゃまする時は夏と心にちかった。ちなみに今回うかがった久通地区には、伝説の『いも羊羹』があるらしい・・・ということは秋にも行かなきゃ・・・(吉)



### 海のゆりかご通信について

漁師さんは、お魚を私たちの食卓に届けるだけでなく、海の生き物を育み、そして海の環境を整える『なぎさー藻場・干潟・サンゴ・ヨシ帯ー』をまもっています。しかし、『なぎさ』は、われわれの暮らしが便利になると引き替えに、近年、減少しました。また、最近の温暖化などによって、その環境や生態系が変化し、更なる危機にさらされています。そうした中、漁師さんなどが行う藻場や干潟をまもる取組を国と地方で支援する「環境・生態系保全対策事業」が平成21年度からスタートしました。

海のゆりかご通信では、この対策事業に参加する『なぎさをまもる』漁師さんや市民の皆さんを紹介します。そして、一人でも多くの方々に身近な場所にある海の現状やそこで暮らす人たちの頑張りを知ってもらい、海や魚を身近に感じ、そして好きになってもらいたいと思っています。

